

韓国・朝鮮語プレゼンテーション授業における

CLIL 教授法の応用と評価

Application and Evaluation of the CLIL Teaching Method in the Korean Presentation Class

柳 朱燕

Ju-Yeon Ryu

Abstract

Content and Language Integrated Learning (CLIL) represents an increasingly popular pedagogic approach that has evolved in response to the recognized need for language education in Europe. The Korean presentation class of Aichi Shukutoku University is the first trial teaching Korean subjects by Korean as target language, following CLIL teaching method. In the Korean presentation class, teacher and students use and speak only Korean. This study first explains how to apply CLIL teaching method to Korean presentation class, reporting the curriculum. And then this study investigates whether CLIL teaching method has an educational effect or not by analyzing results of students' class evaluation questionnaire. The results indicate that there is an educational effect by using CLIL teaching method, and university students have high motivation to learn Korean by Korean. Therefore, the use of CLIL teaching method in Korean expert department is positively suggested, related to the ideal competencies that should be developed in university language education.

はじめに

4つの基本的な言語能力は「聞く・話す・読む・書く」であり、外部からインプットされた情報を理解する受容技能（聞く・読む）と、自分の内部から外部に情報をアウトプットする産出技能（話す・書く）に分けられる。また、話しことばによる能力（書く・話す）と、書きことばによる能力（読む・書く）にも分けられる。言語習得の観点からみると、子どもは自分の母語を習得する際（第一言語習得の場合）、「聞く」→「話す」→「読む」→「書く」の順で習得していくものの、大人が外国語を学ぶ際（第二言語習得の場合）は、「読む」→「書く」→「聞く」→「話す」の順で学習していくと言われている。実際、外国語としての韓国語教育現場ではハングルの文字による読み書き技能を最初に教え、それに基づいて文法の説明を進めており、「話す」技能は学習者にとって触れ合う機会が少なく、なかなか習得できない困難な領域になりつつある。しかし、「話す」技能に対する学習者の要望は高く、日常生活で使えるコミュニケ

ーション能力の向上を学習目標として立てている学習者も多い（野田 2005¹⁾）。外国語としての韓国語を教える教育者は、その学習者の要求を常に把握し、それに適したテキストの開発と教授法の研究に励むべきである。

本論文では、愛知淑徳大学（以下、「本大学」にする）で開設されている「韓国・朝鮮語プレゼンテーション」という授業を紹介し、韓国語上級学習者のためのカリキュラムを考案する際、役に立つ情報を提供することを目的としている。特に、「話す」技能を中心に言語表現力の向上を目指す教授法として本発表の内容が一つの提案となることを願う。

1. 韓国・朝鮮語プレゼンテーション授業の概要

韓国・朝鮮語プレゼンテーション授業（以下、「プレゼンテーション授業」にする）は、本大学交流文化学部の言語分野コリアン・エキスパート専攻で 2014 年から開設された授業である。2016 年までは大学 3 年生から、2017 年以降は大学 2 年生から受講可能な科目で、レベルとしては上級レベルの学生を対象にしている。シラバスには「明瞭簡潔で分かりやすい韓国語プレゼンテーションを可能にする基礎技能や方法を演習形式で身につける。それぞれ興味を覚えたテーマについて、学生自らが資料を準備し発表を行う。さらにそれについて議論する。」と授業の概要が書いてある。学習目標としては「韓国語での口頭表現力やコミュニケーション力を高め、韓国語による自己表現と情報発信を可能にすること」を目標とするが、具体的には韓国語で 20 分間のプレゼンテーションができることを目指している。

プレゼンテーション授業の特徴として、オール韓国語(ALL KOREAN)が取り上げられる。授業中にはすべて韓国語でコミュニケーションを取ることにしており、先生の指示や質疑応答はもちろん、学生のプレゼンテーションに関する指導もすべて韓国語で行われている。教科・科目を目標言語で教える方法を CLIL (Content and Language Integrated Learning)²⁾ と言う。最近、日本の小学校での英語教科の導入において、英語を英語で教えるべきか日本語で教えるべきか、活発な論争が続いている。その CLIL 教授法は約 10 年前から指導効果が検証されてきた教授法で、Dalton-Puffer (2007)ではヨーロッパで行われてきた様々な CLIL 授業の学習効果を分析し、その結果、CLIL 教授法は外国語を学習する際、有意味で大きな効果があると述べている。そのため、ヨーロッパや北アメリカではすでに CLIL 教授法で第二言語を教えていて、大学の外国語教育においては普遍的な教授法として定着している。これは欧米だけではなく、日本や韓国においてもよく起きている現象で、学習者のレベルが高くなればなるほど CLIL 教授法に対する希望は強くなり、外国語教育現場では CLIL 教授法を盛んに導入している。そのような状況の中、本大学でオール韓国語(ALL KOREAN)、すなわち、CLIL 教授法を初めて導入した韓国語の授業が、「プレゼンテーション授業」である。ここではその授業の概要と学生のアンケートによる教育効果を考察したい。

授業中すべて韓国語を使うため、学習者もある程度、韓国語の聞き取りやコミュニケーションに支障がないレベルに達していなくてはならない。そこで、学習者の構成を学年別、留学の

経験有無により以下の表 1 にまとめた。「プレゼンテーション授業」は 2014 年前期から始まり、本論文では著者が担当していた 2014 年前期から 2016 年後期までの 3 年間と、2018 年前後期の 1 年間の授業を分析対象にした。2017 年度は著者の人事異動の関係で「プレゼンテーション授業」を担当していない。受講者数は 8 人から 20 人位で、語学授業の効率性を考えれば、20 人以下の適切な人数であった。6 か月以上留学の経験がある学生は、25%から 56%まで大きな幅が見られる。特に 2016 年度の割合が高くなったが、それは 2015 年度に長期語学研修プログラム「長期海外セミナー韓国・朝鮮語」が始まり、それに参加して帰国した学生が増え、留学経験者の数が上昇した結果になった。2014 年から 2015 年度の間は約 3 分の 1 の学生が 6 ヶ月以上の留学経験者だったが、2016 年度は半数を占めており、2018 年度には 3 分の 1 程度に戻った。そして、カリキュラムの変更により 2016 年度までは 3・4 年生の受講科目だったが、2018 年度からは 2・3 年生の受講科目に変わった。

表 1 受講者の構成

	2014 年		2015 年		2016 年		2018 年	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
受講者数（人）	17	10	10	8	12	16	20	19
2 年生(%)							10(50)	9(47)
3 年生(%)	5(30)	3(30)	5(50)	4(50)	8(67)	13(81)	10(50)	10(53)
4 年生(%)	12(70)	7(70)	5(50)	4(50)	4(33)	3(19)		
6 ヶ月以上留学(%)	6(35)	4(40)	3(30)	2(25)	6(50)	9(56)	7(35)	7(34)

2. 「プレゼンテーション授業」のシラバスと成績評価

「プレゼンテーション授業」は以下の表 2 のようにシラバスを構成している。まず、1 回目の授業でオリエンテーションを行い、講義計画や成績評価方法について説明する。そして、学生にプレゼンテーションしたいテーマを選んでもらい、発表スケジュールを決める。シラバスに書いてある特定テーマの以外に自分の興味のある主題でプレゼンテーションをしたい場合は、最後の自由課題プレゼンテーションを選択し、プレゼンテーションを行う。次に、特定テーマによるプレゼンテーションを行う前、パワーポイントの作成や操作と、プレゼンテーションで使える韓国語に慣れるために、自己紹介というテーマで簡単なプレゼンテーションをする時間を設ける。すべてのプレゼンテーションは教師が見本を見せてから、学生がそれを参考にして発表をする順番になっており、自己紹介も、特定テーマに対するプレゼンテーションも教師の発表が先に行われる。自己紹介はスライド 5 枚以上で 10 分程度発表するようにしている。

全員の自己紹介が終わったら、特定テーマに関するプレゼンテーションが行われる。前述したように教師がそのテーマに関するプレゼンテーションを見本として先に行う。その日は、先

生のプレゼンテーションだけの授業になるので、内容を聞くだけになると、どうしても受動的な授業になるので、教師のプレゼンテーションに対する質疑応答時間を設け、質問をした学生に「授業に積極的に参加した」という理由で加算点を与えている。そのため、学生は積極的に授業に参加するようになる。また、授業の内容をどのぐらい理解しているかを自己評価するために、授業の最後に内容確認テストを行う。これは、成績に反映しないが、学生が自分でチェックし、能動的な動機付与となることを目的としている。教師のプレゼンテーションがあった次の授業からは、学生の発表になり、大体3人の学生がプレゼンテーションを行う。学生はスライドを10枚以上準備し、20分の発表と10分の質疑応答の時間を設ける。前述したように学生のプレゼンテーションに対して聴者側の学生が質問をした場合は、質問をした学生に加算点を与えるので、学生の積極的な参加が督励される。特定テーマは尊敬する人物／好きな映画／日本の昔話／日本の名所／日本の食べ物など身近なものである。以下の図1に教師がプレゼンテーションをしたスライドの例を、図2に学生がプレゼンテーションをしたスライドの例を示す。

表2 「プレゼンテーション授業」のシラバス

回数	内容
1回目	オリエンテーション (シラバスの説明、成績評価方法の説明、発表テーマ・日程の決定)
2~5回目	自己紹介 (教師の見本、高頻度表現の例、発表のマナー、全員スライド5枚分の発表)
6~13回目	特定テーマに関する表現の説明及び練習 (先生の見本、内容確認テスト、質疑応答) 特定テーマの紹介：発表及びコメント (学生のプレゼンテーション、スライド10枚以上20分、質疑応答10分) *特定テーマの例 尊敬する人物／好きな映画／日本の昔話／日本の名所／日本の食べ物など
14~15回目	自由課題プレゼンテーション レポートの提出

연중 절기별 행사

월	일본	한국
1월	正月	신정
2월	節分	설날, 대보름
3월	桃の節句	봄꽃놀이
4월	花見	한식
5월	端午の節句	단오
6월		

절기에 따라 먹는 음식

- 복날
7~8월 중 초복, 중복, 말복의 삼복날에 더위를 이기기위해 보양식을 먹는날
예) 삼계탕
- 동지
매년 12월 22일경
밤의 길이가 가장 긴 날
동지팔죽

한국의 대표 명절 - 설날

- 음력 1월 1일 (2016년 2월 9일)
- 한해의 건강과 풍요를 빌며 가족이 함께 모이는 한국의 대표적인 명절

정월 대보름 (正月 大보름)

- 날짜: 음력 1월 15일
- 의미: 새해 첫 보름날로써 농사의 시작일
- 음식: 오곡밥, 나물, 부럼(견과류), 귀밝이술

図 1 教師が発表したプレゼンテーションの実例

일본 음식이 사랑 받는 이유

- 식재료가 신선한다.
- 담긴 모양이 예쁘다.
- 칼로리가 낮아 건강적.
- 영양의 밸런스가 좋다.

좋아하는 일본 음식 랭킹

외국인		일본인	
1위	초밥(스시)	1위	초밥(스시)
2위	야키니쿠	2위	사시미
3위	라면	3위	라면
4위	튀김(덴푸라)	4위	된장국
5위	사시미	5위	생선 구이
6위	치킨	6위	야키니쿠
7위	카레라이스	7위	카레라이스
8위	달고치	8위	만두
9위	만두	9위	샐러드
10위	돈까스	10위	돼지고기국

※2015년
www.expedia.co.jp

일본식 과자

양과자와 비교하여 유지와 유제품을 사용하는 것이 적고 곡물·콩·설탕을 주원료로 하는 것이 많다. 맛뿐만 아니라 시각적 아름다움이 풍부한 계절감을 표현하고 있다.

図 1 学生が発表したプレゼンテーションの実例

学生は自分のプレゼンテーションの前に、発表原稿を教師に添削してもらうことができる。発表の3日前にメールで送れば、教師が添削して返信する。発表の際は、学生は原稿をそのまま持っていてはいけないことにし、キーワードなどを書いた簡単なメモを手元に持って発表することは可能である。実際、学生がプレゼンテーションをする際、手持ちのメモ無しでスライドだけ見ながら発表をする学生は約10%~20%で、多数の学生が手持ちのメモに頼って発表をしている。最後の授業では、自分のプレゼンテーション内容を小論文としてまとめたレポートを提出する。

成績の評価は出席、授業への取り組み姿勢(30%)、プレゼンテーション(40%)、レポート(30%)の成績を総合して評価する。質問した学生に与える加算点は授業への取り組み姿勢の点数に入り、成績評価に大きな影響を与える。一学期の平均質問数は一人10回ぐらいで、最も多い学生は25回にまで上る。大学の規定により、成績をA+の割合が10%を超えないように、A+とAを合わせた割合が50%を超えないようにするので、プレゼンテーションの流暢さと授業への積極的な参加が成績評価の重要な要素になる。

3. 授業アンケートによる学生の評価

本節では、学生による授業評価アンケートの結果について述べる。授業評価アンケートは本大学で実施しているものを使用した。年1回実施した2014年から2016年の3年のデータと、年2回実施した2018年のデータが分析対象になる。しかし、本大学で行われた授業評価アンケートの設問が2017年を起点として大きく変わったので、アンケートの結果を一つにまとめるのは難しい。そこで、本研究では、2014年から2016年の結果と2018年の結果をそれぞれ分けて分析していく。

3.1 2014年から2016年までの授業アンケート結果

授業評価アンケートでは「授業の進み具合」「先生の教え方」「成績評価基準」など様々な項目があるが、ここでは、「難易度」、「授業の仕方」、「総合的な満足度」を中心に述べる。なぜなら、「プレゼンテーション授業」はCLIL教授法を始めて導入した授業で、オール韓国語で行われる授業に対して学生が疲労感を覚え、授業に興味を失くしてしまうことを心配していたので、難易度の評価を通してその疑問点を解きたいと思う。また、「授業の仕方」を問う設問は「授業の仕方（先生の話し方、声の大きさ、資料、板書の量など）は満足できるものですか」という質問で、オール韓国語で行われる授業に対して学生が授業の内容を理解するのに支障がない程度の教授法であるかどうか、満足度を通して分析したいと思う。さらに、授業評価アンケートの最後の項目である「総合的な満足度」を分析して「プレゼンテーション授業」を総合的に評価したいと思う。表3では2014年から2016年までの3年間の難易度、授業の仕方、満足度を示す。

表3 2014年から2016年までの授業アンケートの結果

●授業の難易度は適切ですか。

年度 (アンケート回答人数)	2014 年 (14 人)	2015 年 (7 人)	2016 年 (10 人)
5. 非常に難しい	0	0	0
4. やや難しい	21.4	14.3	20
3. 適切	78.6	85.7	80
2. やや易しい	0	0	0
1. 非常に易しい	0	0	0
合計（構成比%）	100	100	100

●授業の仕方（先生の話し方、声の大きさ、資料、板書の量など）は満足できるものですか。

年度 (アンケート回答人数)	2014 年 (14 人)	2015 年 (7 人)	2016 年 (10 人)
4. 非常に満足できる	78.6	71.4	100
3. やや満足できる	21.4	28.6	0
2. やや満足できない	0	0	0
1. 非常に満足できない	0	0	0
無回答	0	0	0
合計（構成比%）	100	100	100

●授業は総合的に見て満足できるものですか。

年度 (アンケート回答人数)	2014 年 (14 人)	2015 年 (7 人)	2016 年 (10 人)
4. 非常に満足できる	85.7	57.1	100
3. やや満足できる	14.3	28.6	0
2. やや満足できない	0	0	0
1. 非常に満足できない	0	0	0
無回答	0	14.3	0
合計（構成比%）	100	100	100

「授業の難易度は適切ですか」という質問に対して、3年分のデータを分析してみると、「やや難しい」と答えた学生が約 20%、「適切」と答えた学生が約 80%であった。その結果は、全

一般的に適切な難易度だが、やや難しく感じられる部分があると考えられる。CLIL 教授法の難しさが表れた結果だと思われるが、「非常に難しい」と評価した学生がいないことから、「やや難しいけど、チャレンジになり、その難しさを乗り越えた達成感が感じられる授業である」と評価することができる。Krashen(1982)では「インプット仮説」を主張しているが、言語は聞いたり読んだりというインプットを理解することを通して習得されるとしている。そして、そのインプットは学習者にとって理解できないインプットでは意味がなく、「理解可能なインプット」でないといけないとされている。さらに、Krashen(1982)は習得促進のため、現在の学習者の言語レベルよりも少し高いレベルのインプット（「i+1 のインプット」）が必要だとしている。今回の結果は Krashen の「i+1 のインプット」の仮説が反映されている結果になり、学生にとっては自分のレベルより少し高いレベルの授業を受けたということになり、習得を促進する肯定的な結果が得られた。

「授業の仕方（先生の話し方、声の大きさ、資料、板書の量など）は満足できるものですか」という質問では、「非常に満足できる」という答えが 2014 年 78.6%、2015 年 71.4%、2016 年 100% となり、3 年間 70%以上の高い結果が得られた。特に、否定的な評価、例えば、「やや満足できない」「非常に満足できない」という項目においては答えが無く、授業の仕方については肯定的な評価を得たと思われる。しかし、その評価がオール韓国語の教授法と直接関係があるのかについてはまだ疑う余地はある。この設問からオール韓国語の教授法が高く評価されたと分析するよりは、オール韓国語の教授法に対する強い抵抗は見られなかったという分析が妥当であると思われる。

「授業は総合的に見て満足できるものですか」という質問に対して、3 年分のデータを分析してみると、「非常に満足できる」という答えが 2014 年 85.7%であったのが、2015 年 57.1%に低くなり、2016 年度はまた上がり 100%になって、U カーブを描くような結果になった。2015 年度の大きな特徴は受講生の数が少なく、6 か月以上の留学の経験がある学生の割合が低いことである（表 1 参考）。「プレゼンテーション授業」を担当していた教師としての経験から言うと、2014 年初めてこの科目が開講した時、上級レベルの科目を望んでいた 3~4 年生が沢山受講しており、2015 年ではすでに受講した学生が多いため、受講希望者の数も全般的に減った。また、2015 年では長期留学プログラムを通して韓国へ交換留学生として留学した学生が多く、それも受講者の数が減った原因の一つになる。受講者の中でも留学経験者の割合が低いことから、「話す」技能を中心にする本授業に対して難しさを感じ、全般的に満足度が低くなった結果になった。教師は学習者の構成を見て、指導レベルを合わせていく努力が必要だと思われる。

これからは、授業評価アンケート用紙の裏面にある自由記述式のアンケート結果を紹介する。「この授業について良かった点があれば、自由に記述してください。」という設問に対する答えを分析した。オール韓国語、CLIL 教授法について「授業は、ほとんど韓国語で話してくれるので耳が言葉に慣れることができて良いなと思いました。また、色々な題材のプレゼンを韓国語でしてくれるのも良かったと思います。」「韓国語を話す機会が増え、さらにプレゼンテーショ

ンについても学べるところ。先生もずっと韓国で話してくれるので、能力がつく。すごく楽しいです。」という良い評価があったものの、「分からない単語が分からないまま授業が進んでしまう。」という指摘もあった。プレゼンテーション授業に対する記述は「先生が各トピックにおいて例を示すように韓国・朝鮮のことを教えてくれながらどんなプレゼンテーションをしたらいいか、こんなふうにやるといいですねというのをやってくださるので、わかりやすい。また自分のプレゼンテーションだけでなく、みんなのプレゼンテーションを聞いて質問するスタイルは積極的になれると思う。最初から最後まで韓国語なのでわからないところもあるが、リスニング力の強化になる。」「学生がプレゼンをする前に先生が見本として発表してくださるので、どのようにプレゼンをしたらよいかわかりやすいし、準備がしやすい。」など韓国語でプレゼンテーションができることと、教師の見本に対して高い評価をした。特に 2015 年度の記述式アンケートを見ると、「プレゼンテーションのやり方に関しての指導を増やしてほしい。プレゼンテーション用語とか文法を学習してから、その文法を使いプレゼンテーションをするなど、インプットとアウトプットができるように」というプレゼンテーションスキルの指導を増やして欲しいという指摘もあった。それを踏まえ 2016 年度からは最初の 1・2 回目の授業で、プレゼンテーションのスライド作り方と、プレゼンテーションでよく使う韓国語表現を整理して教える時間を設けた。

3.2 2018 年の授業アンケート結果

2017 年から変わった授業評価アンケートでは「授業の理解度」や「先生の教え方」「学生人格の尊重」など様々な項目があるが、ここでは、「理解度」、「教員の声や話し方」、「授業内容の有効・有益度」を中心に述べる。なぜなら、CLIL 教授法の効果が評価できる項目を選びながら、以前のアンケート調査とも関連性がある項目を分析対象にしたいからである。「授業の理解度」の評価は、2014 年から 2016 年までの授業アンケートの設問ではなかったものの、本研究では「難易度」の評価と比較できる項目として扱っている。「授業の理解度」はオール韓国語で行われる授業に対して学生がどのくらい理解しているかが分かる非常に重要な結果になる。また、「教員の声や話し方」の評価は以前の授業アンケートと同じように、オール韓国語で教わっている教授法についてどの位抵抗なく受容しているかを判断する項目になる。そして、「授業内容の有効・有益度」を問う設問は「授業の内容はあなたの大学での学修にとって有効・有益ですか」と問うているが、これはこの授業が学生の韓国語の学習において役に立っているかを判断する項目として見ている。以前の授業アンケートであった「総合的な満足度」の項目は 2017 年から無くなり、満足度を測る項目はない状況である。「授業内容の有効・有益度」と「総合的な満足度」を対等に比較するのは厳しいと判断し、本研究では「授業内容の有効・有益度」を独立した項目として分析している。表 4 では 2018 年前期と後期で行われた 2 回の授業アンケートの結果を示す。2018 年前期は大学で公式的に実施したアンケートで、2018 年後期は著者が独自で行われたアンケートである。大学で実施する授業アンケートは教師一人当たり年 1 回行う

ことになっており、後期のアンケート実施を頼むことはできなかった。その代わり同じアンケート用紙をもらい、それを使ってアンケートを実施した。また、2016 年以前のアンケートでは無かった「全科目での構成率」が集計され公開されたので、その数値も比較のために表に載せる。

表 4 2018 年度の授業アンケートの結果

●授業の内容は理解できますか。

年度 (アンケート回答人数)	2018 年前期 (19 人)	2018 年前期 全科目平均	2018 年後期 (18 人)
5. 理解できる	52.6	28.2	55.6
4. ほぼ理解できる	36.8	38.5	27.8
3. どちらとも言えない	10.5	22.6	16.7
2. あまり理解できない	0	8.4	0
1. 理解できない	0	2.2	0
無回答	0	0.1	0
合計 (構成比%)	100	100	100

●教員の声や話し方は聞き取りやすいですか。

年度 (アンケート回答人数)	2018 年前期 (19 人)	2018 年前期 全科目平均	2018 年後期 (18 人)
5. 聞き取りやすい	78.9	47.6	77.8
4. やや聞き取りやすい	15.8	27.8	11.1
3. どちらとも言えない	5.3	16.2	11.1
2. やや聞き取りにくい	0	6.6	0
1. 聞き取りにくい	0	1.8	0
無回答	0	0.1	0
合計 (構成比%)	100	100	100

●授業の内容はあなたの大学での学修にとって有効・有益ですか。

年度 (アンケート回答人数)	2018 年前期 (19 人)	2018 年前期 全科目平均	2018 年後期 (18 人)
5. 有効・有益である	89.5	35.1	61.1
4. ほぼ有効・有益である	10.5	36.7	16.7
3. どちらとも言えない	0	22.2	22.2
2. あまり有効・有益ではない	0	4.4	0

1. 有効・有益ではない	0	1.5	0
無回答	0	0.2	0
合計（構成比%）	100	100	100

「授業の内容は理解できますか」という質問に対して、「理解できる」と答えた学生が 52.6%（2018 年前期）と 55.6%（2018 年後期）、「ほぼ理解できる」と答えた学生が 36.8%（2018 年前期）と 27.8%（2018 年後期）であった。その結果は、全科目の平均値と比べたら、高い数値であり、オール韓国語で教えても学生の理解度は落ちないことが分かった。これは CLIL 教授法の効果が検証される有意義な結果である。「教員の声や話し方」では、「聞き取りやすい」と答えた学生が 78.9%（2018 年前期）と 77.8%（2018 年後期）、「やや聞き取りやすい」と答えた学生が 15.8%（2018 年前期）と 11.1%（2018 年後期）であった。この結果も、全科目の平均値と比べたら、高い数値を示しており、オール韓国語で教わっている教授法について抵抗なく受容していることが分かった。最後に、「授業内容の有効・有益度」の評価では、「有効・有益である」と答えた学生が 89.5%（2018 年前期）と 61.1%（2018 年後期）、「ほぼ有効・有益である」と答えた学生が 10.5%（2018 年前期）と 16.7%（2018 年後期）で、全科目の平均値と比べたら、高い数値であり、授業の内容が韓国語の学修にとって有効・有益であると判断できる。しかし、2018 年前期と 2018 年後期で「有効・有益である」という答えの構成比が 89.5%から 61.1%に低くなったことは議論する余地がある。そのうえ、2018 年前期と 2018 年後期の構成比の中、「どちらとも言えない」という答えに関しては、「理解度」、「教員の声や話し方」、「授業内容の有効・有益度」の三つの設問に対して 2018 年前期より 2018 年後期の割合が全部増えている。それは肯定的な評価に迷っている学生が増えていると考えられ、オール韓国語の教授法に適応できず、落伍してしまう学生が現れたと考えられる。2018 年度のアンケート結果を総合的に考察すると、「理解度」、「教員の声や話し方」、「授業内容の有効・有益度」に関しては高い評価を得たものの、オール韓国語の授業内容に理解できず、授業に興味を失い、離れていく学生のために支援が必要だと思われる。

4. オール韓国語（ALL KOREAN）授業に関する意識調査

本節ではプレゼンテーション授業の受講者を対象にし、オール韓国語の授業に関する意識調査を行った。第 3 節で議論した「授業アンケートによる学生の評価」では、大学で全科目を対象にしたアンケートを使用したため、全体的な授業満足度や理解度を測ることができるものの、オール韓国語授業に対する具体的な学習意識は測ることができなかった。そこで、2018 年後期の授業では、2 回の意識調査を実施した。1 回目の意識調査は 2018 年後期が始まって 3 回目の授業（2018 年 10 月 10 日実施）で図 3 のような調査用紙で学生の意識調査を行った。調査は受講生 19 人の内 14 人が参加した。1 回目の意識調査の結果を次の表 5 に示す。2 回目は学期の最後

の授業（2019年1月16日実施）で「オール韓国語（ALL KOREAN）授業についてどう思いますか」という意識調査を自由記述式で行った。2回目の調査は受講生19人の内18人が参加した。2回目の結果を表6に示す。2回の意識調査を行った理由は、オール韓国語の授業が始まった時点、即ち、オール韓国語授業の経験があまりない時での意識と、授業が終わった時点、即ち、オール韓国語授業をたくさん経験してきた時での意識の変化が見られるかを分析するためである。

図3 オール韓国語（ALL KOREAN）授業に関する意識調査票（1回目）

「韓国・朝鮮語プレゼンテーション」科目に関する意識調査

1. あなたは春学期に「韓国・朝鮮語プレゼンテーション」授業を受講したことがありますか？
①はい ②いいえ （追加説明： ）
2. あなたは「韓国・朝鮮語プレゼンテーション」授業ではすべて韓国語でコミュニケーションをすること（ALL KOREAN）を受講する前に知っていましたか？
①はい ②いいえ （追加説明： ）
3. あなたは ALL KOREAN（すべて韓国語でコミュニケーションをすること）の授業をどう思いますか？
①いいと思う。（理由： ）
②あまり良くないと思う。（理由： ）
4. あなたは授業中、先生の韓国語をどのくらい理解していますか？
（ ）% （追加説明： ）
5. あなたは授業中、他の学生の韓国語をどのくらい理解していますか？
（ ）% （追加説明： ）
6. あなたはこれからの授業において、先生の使用言語はどのようになって欲しいですか？
①ALL KOREAN 方針に基づき、今までの通り、韓国語のみ使用してほしい。
（理由： ）
②韓国語をメイン使用言語にして、分かりにくい部分があれば、日本語で説明してほしい。
（理由： ）
③日本語をメイン使用言語にして、韓国語は必要に応じて使用し、分かりやすい授業を進行してほしい。
（理由： ）
7. あなたはなぜ「韓国・朝鮮語プレゼンテーション」授業を受講しようと思いましたか？
（理由： ）

表 5 オール韓国語（ALL KOREAN）授業に関する意識調査の結果（1 回目）

●プレゼンテーション授業の受講経験有無・オール韓国語授業の事前承知可否

	プレゼンテーション授業の 受講経験	オール韓国語授業の 事前承知
有%（人数）	28.6%（4 人）	28.6%（4 人）
無%（人数）	71.4%（10 人）	71.4%（10 人）

●オール韓国語の授業をどう思うか

	オール韓国語授業の意識
「良いと思う」%（人数）	100%（14 人）
「良くないと思う」%（人数）	0%（0 人）

[その理由：自由記述]

- その方が使う機会が増え、上達にも繋がると思うため。
- どうしても日本語だと聞く力も話す力も伸びなくて実用的に使えないから。
- 韓国語能力があがるから。
- 日本で生活していると、なかなか体験できないから。
- 勉強になるし、他にそう言う授業がないため。
- プレゼンテーションなので、前に立って発表する時も韓国語で話すので、普段の授業から ALL KOREAN でやっていたら、語学力の向上にも役立つと思うので、
- 韓国語の理解度が高くなるため。
- 今までそのような授業がなかった。留学後韓国語を使える授業が取れなくて困っていたので、とても助けになった。
- 他の韓国語の授業も日本語で行うのことが多いため、韓国語の方が聴く力も養うことができると思うから。
- 普段の生活の中で韓国語を聞く機会が少ないので、ALL KOREAN が実力がついて嬉しいです。
- 韓国語に慣れることができるから。
- プレゼンの授業以外には ALL KOREAN は存在していないので、韓国語で授業を受けるには良い機会だと思うから。

●授業中使用する韓国語の理解度（自己判断）

	教師の韓国語	他の学生の韓国語
%（平均値）	86.1%	86.1%
Range	60%~100%	70%~100%

●授業中使用言語

	ALL KOREAN	韓国語メイン	日本語メイン
%（人数）	64.3%（9 人）	35.7%（5 人）	0%（0 人）

●プレゼンテーション授業受講理由〔自由記述〕

- 楽しそうだったから
- 雄一の韓国語で進行される授業だから
- 韓国語をもっと話せるようになりたいと思ったから
- 自分で韓国語を用いてプレゼンテーションをすることにより語学力が向上しそうだから
- 先生の授業が好きだから
- 韓国語でプレゼンテーションをしたことがなく、興味を持った。
- 韓国語を使って誰かの前で発表する力を身につけたかったから
- 韓国語を使って自分の発表をする力が身につくため
- 留学のせいで取れる授業がなかった
- 留学中に韓国語でプレゼンする機会があり、かなり力をつけるのに役立ってたので、大学にも講義があるなら受講しようと思ったから
- 全て韓国語でプレゼンをできる機会はないと思ったので、人前で発表をすることで実力がつくと思ったからです。
- 他の先生の勧めを受けたことと、韓国語力を向上させたかったから
- 楽しそうだったし、韓国語の能力が伸びると思ったから

表5の結果を見ると、プレゼンテーション授業である「韓国・朝鮮語プレゼンテーション①」を前期に受講し、後期にまた「韓国・朝鮮語プレゼンテーション②」を受講した学生が28.6%であるのに対し、後期に初めてプレゼンテーション授業を受講した学生は71.4%だった。また、オール韓国語で授業を行うことを知らずにプレゼンテーション授業を取った学生は71.4%で、事前承知率は低いことが分かった。しかし、それに対してもオール韓国語の授業について全員が「良いと思う」（100%）と答え、オール韓国語授業に対する好感度は高いことが分かった。その理由について自由記述の答えをみると、学生の多数はオール韓国語の授業を行うことによって語学力の向上を期待していることが分かった。また、授業中使用する韓国語についてどの位理解しているかを聞いた結果、教師の韓国語の理解度は86.1%、他の学生の韓国語の理解度は86.1%であり、同じ平均値を示した。しかし、答えの幅を見ると、教師の方が60%~100%で他の学生（70%~100%）より幅が広く、教師の韓国語の方を難しく感じることが分かった。しかし、これは自己判断でどの位理解しているかを書いてもらったため、客観的な数値ではないことを考えなければならない。それにも関わらず自己判断で86.1%理解できるということはオール韓国語授業に対する負担感が比較的軽くないと考えられる。

最後に、授業中使用して欲しい言語についてを聞いた設問では、64.3%がオール韓国語を、残りの35.7%が韓国語をメインとし、日本語も混用して欲しいと答えた。この結果は以前の結果と相反するよう見える。オール韓国語教授法に対して良いと思い（100%）、韓国語の理解度も高い（86.1%）が、使用言語を日本語と混用して欲しい学生が多数（36.7%）存在する。これ

は韓国語メインで日本語の混用を選んだ学生の理由を見ると、正しく理解ができる。表 5 には記載していないが、日本語の混用を選んだ学生（5 人中 1 人無応答）の理由を以下に書いておく。

—完璧に全て分かるわけではない部分もあると思うので、日本語で説明してもらって理解したいから
—皆が全てを理解しているわけではないと思うので、日本語の説明もあるとより分かりやすいと思います。

—100%理解できている自信がないから

—重要なことが分からないと困るから

この理由を見ると、やはり韓国語で理解ができない部分に対する心配があり、それを補うために日本語の使用を求めることが分かる。これはオール韓国語授業の仕方を受け入れるのに初期段階としてハードルが高く、心理的に不安な要素を持っていることが分かった。しかし、これは授業が始まって間もない時の意識調査の結果であり、15 回の授業を受けた後の学生の意識はどうなっているかを見なければならない。以下の表 6 を見ると、オール韓国語授業に対して肯定的な評価を書いた学生が多数で、一人の学生（最後の行）だけが否定的な評価をしている。その理由は理解できなかった部分がそのまま進んでしまうことである。しかし、多数の学生は授業の初期に抱いていた不安要素を乗り越え、楽しく授業ができたと記述している。これはとても励みになる結果である。

表 6 オール韓国語（ALL KOREAN）授業について意識調査の結果（2 回目）

<p>● オール韓国語授業についてどう思いますか。[自由記述]</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 他の授業ではない、感じだから、聞き取りの力がつく気がします。 ● プレゼンテーション①の時は聞き取るのが大変だと感じたけど、プレゼンテーション②では聞き取れるようになって、楽しかった。 ● 他に ALL KOREAN の授業がないため、韓国語を伸ばしたい自分にとってはとてもありがたいですし、勉強になります。 ● 日本語で会話するよりすべて韓国語するほうが語学力向上のためにいいと思います。 ● 韓国語を勉強していて、実力を伸ばしたい私にとっては ALL KOREAN の授業はすごく勉強になりました。ALL KOREAN でたくさん授業してほしいです。 ● すべて韓国語で授業を行ってくださって良かったです。日本で生活する間は韓国語を使う機会がなく、心配でしたが、この授業のおかげで、韓国語にずいぶん慣れてきました。 ● とてもいい機会だと思います。雄一の ALL 韓国語の授業なので、これからもこのまま授業があるといいなと思います。
--

- 先生が分かりやすく、ゆっくりしゃべってくださったので、分かりやすかったし、面白かったです。全部韓国語なのは新鮮で良かったです。
- 他の人と比べて韓国語のレベルが低いけど、先生がわかりやすい言葉で説明してくれるし、明るくて面白くて楽しく受けることができました。
- 楽しいです。あまり話せなかったけど、ある程度なら分かるし、有意義でした。
- 全部韓国語で行われるのに、はじめは心配でしたが、思っていたより大丈夫でした。
- 私は授業中ずっと韓国語でやるのに賛成です。その方がずっと韓国語を聞くこともできて、耳になれるので良いと思います。
- 勉強になるので、良いと思います。
- 普段他の授業では日本語で行うものが多いので、聴く力も養えるいい機会だと思います。
- 良いと思います。
- 韓国語ですべて授業をしていたので良かったです。
- ALL KOREAN なので先生の言っていることすべてを理解するのができなかった部分がありました。

終わりに

本稿では、本大学で行われている「韓国・朝鮮語プレゼンテーション授業」の概要を紹介し、アンケートによる学生の評価と意識調査を分析しながら、授業の教育的効果を考察した。韓国語を教える教育者として最も悩むところは学習者の要求に合わせた効率的な授業を行うことであろう。特に、上級学習者のため、新たなカリキュラムを探している場合、「話す」技能を中心とした「韓国・朝鮮語プレゼンテーション授業」が一つの提案となることを期待する。今後の課題として、教師が受講者のレベルや学習歴などに合わせて有機的にカリキュラムの調節を行うことと、必要に応じて授業中に使う単語の難易度を変えることができるように、教師の力量を高める工夫が必要である。

付記

本稿は、日本韓国語教育学会第8回学術大会（2017年11月4日於愛知学院大学）での口頭発表の内容を増補・改訂したものです。発表会場において貴重なご意見をくださったみなさまに感謝申し上げます。また、本研究の実践にあたり、「韓国・朝鮮語プレゼンテーション」授業を受講し、意識調査に参加した学生のみなさまに心より感謝を申し上げます。

注

- 1) 野田(2005)では、第二言語としての日本語教育において「話す」「聞く」「読む」「書く」の4技能別に、コミュニケーションに必要なかどうかという観点から文法を考えることの必要性を主張した。本研究ではその現象が第二言語としての韓国語教育現場

でも同じく起きることを前提し、野田(2005)を、現在引用している。

- 2) 教科・科目を目標言語で教える教授法を「直接教授法」及び「CLIL (Content and Language Integrated Learning)」、「CBI (Content-Based Instruction)」とも言える。「CLIL」と「CBI」の違いに関しては、植松(2012)を参考する。本研究では、「韓国・朝鮮語プレゼンテーション」授業が語学科目でありながら、文法の説明や会話の繰り返し練習などが無いことと、韓国の基本情報をプレゼンテーションという形式で教えることが一般講義科目と似ていることを踏まえ、「CLIL」を導入して教授法を説明した。

参考文献

- 野田尚史 (2005)「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』1 - 20, くろしお出版
- Dalton-Puffer, C. (2008). Outcomes and processes in content and language integrated learning (CLIL): Current research from Europe, in W. Delanoy and L. Volkmann (eds): Future Perspectives for English Language Teaching. Carl Winter, pp. 139-57.
- Krashen, S. D. (1982). Principles and practice in second language acquisition. Oxford: Pergamon.